

開発教育を取り入れた英語教育

－参加型手法の実践－

小 林 香 保 里

Development Education in English Classes: The Pedagogy to Promote Students' Participation and Understanding

Kahori Kobayashi

抄 録

本稿は、大学の英語の授業活性化のために開発教育を取り入れた実践報告である。一般教養のリーディングの授業で、社会問題を扱い、Content-Based Instruction を実施している。読む活動の前後で学生に意見交換を促すが、内容に関する理解が十分でない時や自分自身の事と結び付けにくい場合は活発に議論できない。そこで、参加型形態が中心である開発教育の教授法に着目した。開発教育の参加型手法は、理解を容易にし、活発な議論を促す。その手法を実践し、それがいかに英語教育に有効であるかを考察した。実践の効果、今後の課題や展望について述べる。

キーワード：参加型学習、開発教育、インターラクシオン、内容中心教授法

(2011年10月1日受理)

Abstract

This is a praxis report on my reading classes of English as a Foreign Language (EFL) in the general education. I deal with the social issues in Content-Based Instruction. It is challenging to activate students' discussion before and after reading the text when they do not understand the issues very well or can not relate them personally. The center of the pedagogy used for development education is based on students' participation. Its skillful ways enable students to participate and engage in learning actively and also promote their understanding. I would like to report how the pedagogy worked in my classes and also discuss the problems and future assignments.

Key words: participation, development education, interaction, Content-Based Instruction

(Received October 1, 2011)

1. はじめに

本稿は、大学での英語の授業の活性化のために、開発教育の参加型の手法を取り入れた実践報告である。これまでの私のリーディングの授業では、Content-Based Instruction（内容中心教授法）を実施し、社会問題を扱った内容をふんだんに取り入れてきた。トピックへの導入時や、テキスト及び読み物資料等で知識を得た後、内容に関しての意見交換の場をもうけることが多い。しかし、内容に対する理解が十分でない場合や、取り扱う社会問題を自分自身のこととして学生が捉え切れていない状況では、活発な議論を促すことは困難である。そこで、以前より自身が体験して効果を十分に実感していた参加型の手法を英語の授業に取り入れた。

参加型の手法では、体験しながら、難しい事柄でもわかりやすく理解することができる。知識を詰め込むというよりは、「そうなのか」という気づきを促す。グループや全体での意見や気づきのシェアリングが活発で、思っていることを発言しやすく、質問が自然と浮かんでくる場合が多い。受身ではなく、活動に参加して学んでいると実感できる利点もある。取り扱うテーマはとても深刻な内容のものが多いが、その学習過程は楽しく、学習者自身が元気づけられるほどである。

環境、貧困、人権、平和、援助、多文化理解などをテーマとした開発教育セミナーの活動や、紹介された教材をもとにアレンジした参加型アクティビティの実際とその効果について報告する。2006年度から2010年度に渡り、大学2年生の一般教養英語のリーディングの授業で実施した。対象学生の専攻は、人文学（地理、歴史、文学、心理学、人間文化学）と工学（電子工学、材料科学、機械）で、授業は通年で行った。各クラスの人数は約30名。英語のレベルはいずれも intermediate (TOEIC 300-450点相当)であった。専攻によって詳細は異なるが、大まかな授業の構成及び活動について述べる。その効果や課題、今後の展望についても議論したい。

2. 背景

2.1 開発教育

まず、開発教育における開発とは、現在では、「人間を中心とした社会開発」という意味で使われている。(田中、2004:5)文化、人権、環境などに関連した世の中の様々な問題の解決に向けて、それらが起きる社会構造を理解する。それらの問題と自分とのつながりを考えながら、一人ひとりが参加し、協力して行動する態度を促すことが目的である。(小貫、2004)単なる知識の注入ではなく、いかに学ぶかに重点を置く。従来の教師中心の授業では限界があるので、学習者中心の参加型学習が取り入れられている。参加型アクティビティにはゲーム、シミュレーション、ロールプレイなど、学習者が体験しながら問題の本質に気づき、その後の意見交換で理解を深めたり、知識や意見をより確かなものにするためにディベート、インタビュー、プレゼンテーションなどを行う。いずれも、open-endで、

学習者自身が能動的に問題の本質に気づき、考えを深めていくため、発言や他の学習者との協同作業を重視している。

2. 2 英語教育と国際人

現代のグローバルな社会で求められる真の国際人とは英語の技術習得のみならず、地球市民としての視野を身につけ、考え、行動できる人材のことだと私は考える。そのためには、従来の教師中心の講義形式の授業からの脱却を図り、学生中心の参加型授業の促進を提案する。取り扱う内容に関しては、世界の状況について英語圏あるいは先進諸国の見解を学習するだけでなく、様々な角度から公平に考察し、それに対し自分なりの意見を持ち、行動する姿勢を促すことを目標とすべきである。開発教育の内容、手法はまさにこの教育目標を支え、導くものである。

2. 3 English as a Second Language (ESL) 教授法

2. 3. 1 Interaction & Collaborative Learning (インターラクシオンと協同学習)

語学の学習効果をあげるために学生が参加するのが楽しみでならないような楽しい授業を行うということが重要である。私の教育理念は、学生の授業参加を促し、仲間と切磋琢磨しながら学ぶ喜びを育み、学習効果を高めるというものである。

Krashen & Terrell (1983) によると語学学習は学習者とその学習自体に意味を見出せるものでなければならない。さらに学習者同士のインターラクシオンが増えれば増えるほど、語学学習はより意義深いものとなり言語習得も促進される。学習に対する自信を生み出し、学習者にやる気を起こさせる。従来の教師中心の教授法では、全体の6割から9割の発話を教師が占めていると言われている。(Deen, 1991) しかし、Haley & Austin (2004) によると学生中心の協同学習などの参加型授業では、インターラクシオンが活発になり、学生の発話量が増すばかりではなく、学習内容への理解も深まる。また、学習コミュニティの形成により、学生同士が支えあい積極的に授業に取り組み、学習に時間がかかりすぎているという精神的な負担を軽減して、効率的に学習効果をあげることができる。(Peirce, 1995) このように、インターラクシオンは、語学学習効果向上に深く関わるものと考えられる。

2. 3. 2 Content-Based Instruction (内容中心教授法)

Brinton ら (2003) によると Content-Based Instruction の1タイプである Theme-Based Model (テーマ中心プログラム) は、あるテーマに関する内容の学習理解を通して英語の4技能 (Listening, Speaking, Reading and Writing skills) を習得することを目的とする。英字新聞や英語のニュース放送などなるべく実際に使用されている言語材料を教材として使い、テキストはあくまで補助教材とする。内容を軸とした実技を課すことにより、自然な形で英語を習得させることができる。

2. 4 英語教育と開発教育

Global Education を推奨する Cates (2002) は、英語教育に開発教育の考えや手法を取り入れた先駆者である。彼によると Global Education は、伝統的なやり方とは異なった新しい語学教授法である。世界の諸問題を解決するために地球市民にとって必要な知識、技能、態度、行動を学生に身につけさせる一方で、語学も習得させるというものである。開発教育や Global Education で取り入れられている参加型学習形態は、ESL 教授法で効果的とされているインタラクティブを促進する。また、環境、貧困、人権、平和、援助、多文化理解などのテーマに関して予備知識が乏しい学習者にも、その内容の導入、理解をスムーズに進め、考えを構築させることができる。さらに、Content-Based Instruction による内容理解を通じた言語習得を進める上で大いに役立つ。Cates は 1990 年より Global Education の日本国内外での普及のためのネットワーク作りを始め、これに伴い賛同する教師は年々増加していった。また、環境、貧困、人権、平和、援助、多文化理解などを扱った教科書が多く出版され、現場で高く評価されている。例えば、*Taking Action on Global Issues* (Asakawa, Uetsuki, Stronell, Lafaye, 2003)、*Life in Our Global Village* (Andrade & Andrade, 2010)、*Looking Back, Moving Forward* (Summerville, 2006)、*You, Me and the World* (Peaty, 2005)、*Topics for Global Citizenship* (Peaty, 2006)、*Good News* (Peaty, 2007)、*Confronting the Issues* (Peaty, 2010) などがあげられる。

以上のように、開発教育の内容と手法を英語教育に取り入れることは、たいへん有効であると考えられる。私の授業の目標は、学生がトピックで紹介されている社会問題を認識して理解し、それに対して自分なりの意見を持ち、そしてその解決に向けて何らかの行動をとる足がかりを掴むこと。そして、その一連の活動を通して英語の技能を身につけることである。そのためには、学生にとって受身の教師中心の授業ではなく、学生が主体となる学生中心の授業が必要となる。自分の意見を他の人々と共有して説明する過程で、より確かなものにする。開発教育の参加型アクティビティは、この教育目標を達成するのに最適の教育方法と考え、授業で実践した。以下にその実践例を報告する。また、学生からのコメントを基に、その効果や今後の課題、展望について述べる。

3. 授業内容

3. 1 対象学生

大学 2 年生の一般教養英語のリーディングのクラス。対象学生の専攻は、人文学（地理、歴史、文学、心理学、人間文化学）と工学（電子工学、材料科学、機械）で、授業は通年で行った。各クラスの人数は約 30 名。英語のレベルはいずれも intermediate (TOEIC 300-450 点相当) であった。英語はあまり得意ではないが、積極的に学習に取り組もうとする学生が多数であった。

3. 2 目的及び目標

環境、貧困、人権、平和、援助、多文化理解などのグローバルな問題について読み、理解する。問題と自分を関連付けて、それに対する意見を持ち、解決に向けて行動する姿勢を養う。行動を起こすための基盤となる考えを構築するため、意見交換やプレゼンテーションを行う。これを繰り返すことで自分の考えを発信できるようになる。

3. 3 講義概要

授業は1コマ90分、週1回、30週行う。先にあげた目的を達成するために、環境、貧困、人権、平和、援助、多文化理解などをテーマとしたリーディング教材を使用する。授業は、教師、学生共、できるだけ英語のみを使用して行う。まず、導入としてテーマに関して意見交換する。学生のテーマに関する背景知識が不十分な場合は、関連したビデオ（オンライン）、DVDや準備した資料（オンライン）を見る。もしくは、開発教育のアクティビティを体験する。語彙を確認後、skimmingのスキルを使って、本文を速読し、main ideaを確認する。次に、本文の内容に関する教師の英語での問いかけの答えをscanningのスキルを使って本文より探し、英語で答える。その後、教材に示された読解問題に答える。（予習として語彙の確認、本文速読、読解問題は済ませてあるが、授業でもう一度確認する。）宿題としてテーマごとにグローバルな問題への理解を深めるために、インターネットを用いて調べ、英語でレポートを書く（50-100words程度）。次の授業で、確認小テスト（語彙、読解問題）を受ける。また宿題として書いたレポートを、グループ内にて英語で発表後、グループメンバーの意見をまとめて、代表がクラス全体に英語で発表する。もしくは、開発教育のアクティビティを体験する。グループ活動の際は、例えば、Facilitator（進行役）、Question-maker（グループ内で質問係）、Writer（意見を整理して書く係）、Reporter（発表者）などの役割をグループ内で各々の学生が担う。教師の役割は、学生の活動がスムーズに行われるようFacilitator、Supervisor、Advisorとして務める。学期末にグローバルな問題に関してリサーチし、英語でプレゼンテーションを行う。一連の活動を通して、リーディングを基本としつつ、英語4技能の向上と地球市民として行動できるようになることを目指す。

3. 4 開発教育のアクティビティの実践事例

開発教育のアクティビティは数多くあるが以下に私の実践した例を紹介する。まず、アクティビティや言語活動の目標を示す。次に（1）手順、（2）学生の反応及び工夫した点、（3）学生の感想（アクティビティ直後の振り返りシートを出席者全員に提出させた。主に、全体の声を代表する意見を紹介するが、必要と思われる場合は少数意見も記す。実際は英語で書かせたが、日本語にて下記にまとめる。）、（4）今後の課題について、順に述べる。

3. 4. 1 シミュレーションゲーム「欲しいもの、必要なもの」(開発教育推進セミナー(編)、1995 : 36-37)

学期初めにコースの目的や目標を理解してもらうため、導入として行った。まず、このゲームで、学生は Basic Human Needs (人間が生存するために最低限必要なもの) とは何か直感的に気づくことができる。教師が説明するよりも、ゲームを通して自分の場合に当てはめて考えた方が理解が深まる。次に、本コースの目標を説明した。Basic Human Needs が満たされていない人々が、世界には多く存在する。そのことが抱える諸問題について知り、自分のことと関連づけて考え、問題を解決するために行動できるようになることを目指す。アクティビティに関する言語活動は、簡単な英語の問いかけに英語で答えること、Basic Human Needs に該当する英単語を確認すること、ゲームの感想を英語で書いて発表することを目標とした。

(1) 手順

- ① 学生を6つのグループに分ける (1グループ5 - 6人)。まず、学生各々が、“What do you need to live?” という教師の問いかけに3分間で答えを考え、ノートに5から10個の英単語で書く。
- ② 次にグループ内で、同じ問いに対する答えを各々の学生の回答をもとに5分間話し合っただけ考え、5から10個の英単語で書く。この際、順位付けもする (ランキング)。
- ③ ランキングした回答をグループごとに黒板に書く。
- ④ Facilitator としての教師が、グループごとに書かれた回答の共通点や、異なる点を指摘する。
- ⑤ 教師の指摘を聞いているうちに、学生は、共通する回答が Basic Human Needs であることに気づく。
- ⑥ Basic Human Needs について教師の説明を聞く。
- ⑦ 振り返りシートにアクティビティの感想を書く。
- ⑧ 感想をグループ内でシェアした後、クラス全体でシェアする。

(2) 学生の反応及び工夫した点

- ① 初めての授業での問いかけに戸惑った様子もうかがえたが、「シンプルな質問なので、説明は受け付けません」と、あくまで学生に考えさせて答えさせるよう努めた。
- ② 必要最低限度のものを書くのか、欲しいものを書くのか、人によって答えが分かれたが、そこをどう判断するかがゲームのポイントなので、何を書いてもよいとした。

(3) 学生の感想

- ① Basic Human Needs がどういうものか、身にしみてよくわかった。
- ② 簡単な英語しか使っていないのにとても内容があるアクティビティだった。
- ③ とても分かりやすいし、楽しかった。

(4) 今後の課題

学生が open-end やシミュレーションのアクティビティに慣れていなかったため、戸惑いが見られた。どんな回答も受け入れられるのだという雰囲気作りを心がけることが必要

である。また、様々な回答を受容しながらも、こちらが意図する Basic Human Needs へと結びつくようにまとめる必要があり、各々の回答への対処には、教師の力量が問われる。どうしても、うまくまとめられない場合は、更に質問を追加して、クラス全体で再考することが必要である。平易な英語で活動がすすめられるため、英語のやりとりはスムーズに運んだ。振り返りのライティングで、もう少し難易度をあげた語彙を使用することを促してもよい。

3. 4. 2 「貧困の輪」アクティビティ（開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会（編）、2006：78-99）

「貧困」についてのユニットをいくつか読んだ後、更に考えを深めるために行った。このアクティビティでは、貧困の現状と構造を理解したうえで、その原因を考える。また、それに対処する援助のあり方を援助される側の立場に立って、自分には何ができるだろうかということを考え、行動を起こす足がかりとする。既存の援助についても考察し、クリティカルな考え方を養う。「貧困」に関する語彙の習得。原因、結果を表す英語表現の理解と活用。学期末の英語でのプレゼンテーション（自分が賛同する NGO を調べて発表する）の基となるように、調べたいジャンルや自分の興味を英語で表現できるようになるということを目指した。

(1) 手順

- ① 学生を 6 つのグループに分ける（1グループ 5 - 6 人）。「Poverty」という語を中心に、連想される状況や、関連する事柄を英単語や表現で派生図を作り、配布された用紙に書く（ウェビング）。
- ② 各グループがウェビングで書き出したものをグループ間でまわして、他のグループのものを見て、自分のグループとの違いを話し合い、クラス全体でシェアする。
- ③ シミュレーションゲーム「世界がもし 100 人の村だったら」(分配編)を実施する。(100 人村教材編集委員会(編)、2003：19) 世界の人口分布に合わせて、グループを再編成し、クッキーを配布する。少人数なのにたくさんあったり、大勢でも少ししかもらえないことから、食料受給の不均衡、飢餓について気づく。
- ④ “If the World Were a Village of 100 People” (by C. Douglas Lummis, <http://www.jamsarts.com/100people.htm>) を読む。世界の諸問題に気づく。
- ⑤ 英語で書かれた「貧困」の要素である 8 つのキーワードを各グループに配布する。グループ内で話し合い、キーワードをセロテープでつなげて、「貧困の輪」を作る。
- ⑥ 次に、貧困状態から脱却するために断ち切らなければならない要素を「貧困の輪」を構成する 8 つの中から選び、その理由について考える。
- ⑦ 各グループの貧困の輪を黒板に貼る。代表が貧困の輪の各要素の連携理由(因果関係)と断ち切る要素及びその理由について英語で発表する。
- ⑧ 「貧困」を無くすための援助のあり方や実行可能な援助について意見を書く。
- ⑨ 自分たちが考えた実行可能な援助を行っている NGO を調べて、その活動内容や活動

に参加する方法などをグループ・プレゼンテーションで発表する。

(2) 学生の反応及び工夫した点

- ①「貧困」の現状についてシミュレーションゲームで疑似体験し、原因、人間にとって必要なもの (Basic Human Needs) や大切なものについて考えさせた。
- ②援助のあり方については、グループ内で机上論に終わりそうな意見も出ていた。そういう場合には自身と関連付け、自分ができる範囲の援助から考えさせ、NGO へと結びつけるよう机間巡視をしながら促した。
- ③“Poverty” についてのウェビングや援助のあり方を模索する際、色々な意見が出た。クラス全体でシェアする際、教師が意見の優劣をつけることなく、できるだけ様々な角度の意見を紹介して、学生が主体的に考えられるように工夫した。
- ④アクティビティに使用する英語は、できるだけ既習の知識で理解できるように工夫した。英語で活動がスムーズに行われるよう役に立つ語彙や表現、文の例を示した。考えをまとめたり、英語で表現するのに時間を要する場合は、宿題とし、時間的余裕を持たせた。
- ⑤適宜机間巡視し、アクティビティの進行状況をチェック。滞っている場合は、質問を投げかけ、進行を助けた。

(3) 学生の感想

代表的な意見は、以下の通りである。

- ①1つ1つの悪いことを、バラバラに捉えるのではなく、関連性があるという見方をする必要があったことがわかった。
- ②援助には、問題の根源がどこにあるかを見極めて、その部分を改善するように手助けすることが大切だ。
- ③困っている人たちが自立できるよう、また持続可能な援助をするべきだ。
- ④難しいことだが、楽しく学べ、考えが深まった。
- ⑤例文を示してもらえたので、説明も英語でなんとかできた。達成感があった。一方で、下記のような意見も少数ではあるがあった。
- ⑥もっと英語 (基本的な文法等) をやって欲しい。

(4) 今後の課題

背景知識が乏しく学生が難しいと感じる内容でも、開発教育の参加型アクティビティを用いることで、説明する部分が大幅に減り、英語を最大限に使った授業の展開が可能になり、より実践的な場面で英語学習を進めることができた。しかし、一方で、更なる英語技能の補助が必要な学生がいたことも事実で、より多くの役に立つ英語の語彙、表現、基礎構文を導入段階で示す必要がある。反復して使用しているうちに身につけていけるよう系統だった表現、構文集を作成したい。

3. 4. 3 「難民」アクティビティ（開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会（編）、2006：136-151）

「難民」についてのユニットを読んだ後、理解を深めるために行った。背景知識が乏しい学生がほとんどで、教科書である程度の知識を得たものの、この問題について考えたり、意見を発言したりするのは、まだまだであった。写真、新聞記事、DVDを見たり、ロールプレイをすることで、より難民を近い存在に認識し、次の行動のための基盤を築くことを目標とした。言語活動では、役に立つ表現を確認した後、ロールプレイでのセリフの一部を学生自身が考えてオリジナリティやクリエイティビティを出すということを目指した。

(1) 手順

- ①難民キャンプの写真を見て、グループでわかったことや感じたことをシェアする（フォトランゲージ）。
- ②写真の解説を教師より聞く。
- ③「難民」の定義や現状について知る（難民クイズ、UNHCRの資料及び日本の状況についての英字新聞記事）。
- ④ドキュメンタリーフィルム“Living on the Line”（ビルマの難民についてのオンラインビデオ、<http://video.google.com/videoplay?docid>）を視聴する。
- ⑤「自分たちが難民だったら」（欲しいもの、必要なものゲーム）を行う。
- ⑥難民の現状についてロールプレイする（4つの現状を設定する）。グループにて各々のセリフ（部分）を考えて、英文で書き、全体を口頭練習の後、クラスの前で発表する。
- ⑦振り返りシートに記入する。
- ⑧振り返りシートをもとにグループ、クラス全体で意見をシェアする。

(2) 学生の反応および工夫した点

- ①「難民」や「難民」が生み出される社会構造について知り、援助のあり方を考えさせた。
- ②フォトランゲージは有効な学習方法であるが、慣れていない場合はあまり意見が出ないので、教師が質問（5W1Hなど）を投げかけ、それについて答えさせる形をとった。
- ③アクティビティに使用する英語は、できるだけ既習の知識で理解できるよう工夫した。平易な英語を使用し、専門用語には注釈をつけた。また、内容が推測しやすいように挿絵もつけた。
- ④「難民」を自分自身と関連付けるのが困難だったので、日本在住難民に関する新聞記事を読み、実情に触れ、地震、津波、台風被害による災害を想定して、身近に起こりうる可能性を認識させた。
- ⑤ロールプレイに慣れていない学生が多いので、セリフはあらかじめ設定し、空欄補充で、オリジナリティを出せるようにした。その際、必要に応じて既習の表現や、役に立つ表現を与えた。

(3) 学生の感想

- ①難民についてあまり知識がなかったが、一連の活動を通してよくわかった。

- ②難民は自分とは関係ない世界だとどこかで思っていたが、関わろうと思えば今日からでも彼らをサポートする何かに関わると気づいて、彼らの世界は自分のすぐ隣にあると思った。
- ③非常に驚いたが、もっと知って自分ができることをやりたい。まずは、周囲の人に伝えたい。
- ④自分でセリフを考えるのは、面白い。英語で実際に自分の言葉で話している実感が湧いた。

(4) 今後の課題

特定の状況に置かれた人々の気持ちを理解するために、ロールプレイはとても有効であったが、ロールプレイに慣れるために、日頃からの練習の必要性を感じた。大規模なアクティビティでなくてもよいので、リーディングの後、場面を設定し、短い英語のダイアログとして取り入れていきたい。またオリジナリティやクリエイティビティが増やせるよう、系統立てて指導する必要がある。

3. 4. 4 「イス取りゲーム (マイノリティ被差別体験)」(NGO 団体「ジュマネット東京」の好意により掲載可となった。)

マイノリティについてのユニットを読む前の導入として行った。シミュレーションでマイノリティ差別について自ら体験し、差別が起きる理不尽さを考え、差別を許さない心と、一人ひとりの人権を尊重する気持ちを机上論ではなく真摯に育てる。ゲーム後の、受け答えの際、単語ではなく、できるだけ完全な英文で話せることを言語活動の目標とした。

(1) 手順

- ①参加者を2つのグループに分ける。(じゃんけん)
- ②じゃんけんに勝ったグループに青リボンを、負けたグループに赤リボンを渡す。用意したイスにも、青リボン、赤リボンをつけておく。その際、青リボン(マイノリティグループ)のついたイスを少なめにする。
- ③通常的要領で、音楽などでリズムをとり、イス取りゲームを進める。
(ルール)座れるのは、自分のリボンと同じ色のリボンがついたイスのみ。
- ④イスに座れなかった人は決められた別の場所に移動する。
マイノリティグループ：机で囲った狭い場所に立ったまま。
マジョリティグループ：別のイスに座る。
- ⑤順次イスを減らす。青リボンのついたイスを多目に減らす。
- ⑥進むにつれ、座れない青リボンの人が増える。移動先の円の中も人数が増え、窮屈になる。
- ⑦青リボンの人がなくなった時点でゲーム終了。
- ⑧感情カードにゲーム後の自分の感情を表す。あらかじめ8つのキーワードが英語で記入されており、該当する感情をいくつ選んでもよい。ひとつだけ中央に自分の言葉を追加して英語で書く。グループで感情をシェアし、ゲームの意味について考え、クラ

ス全体で意見交換する。

⑨ゲームの主旨について教師の説明を聞く。

⑩振り返りシートに記入する。

⑪振り返りシートをもとにグループ、クラス全体で意見をシェアする。

(2) 学生の反応および工夫した点

①少数民族や人種差別を疑似体験させた。デリケートな内容を扱うので、いじめなどにつながらないよう細心の注意を払ってアクティビティを選び実施した。

②「イス取りゲーム」自体は、言語学習活動ではないので、導入としてできるだけ短時間で済むよう心がけた。

③ゲーム後の意見交換や振り返りに時間を十分にとり、ゲームの真意が正確に伝わるよう、また差別についてじっくりと向き合えるようにした。

④完全な文で話せるよう必要な構文を配慮して与えた。

(3) 学生の感想

①最初は、ゲームの意図がよくわからなかったが、活動が進むに連れてよくわかった。

②差別される側の気持ちがよくわかり、良い活動だった。

③「イス取りゲーム」は、ただ単に楽しかったが、これが、差別を体験するゲームとは感じなかった。

④授業がすべて英語で行われるためリスニングの力がついた。

(4) 今後の課題

ゲームの意図を理解しにくかった学生もいたが、やはり扱う内容がデリケートなので、差別をより明確にするのではなく、ゲーム後の活動を工夫して理解が深まるようにしたい。このことは、完全な文で話せてもワンパターンになりがちなスピーキング活動を活性化するのにも役立つ。例えば、感情を表すだけではなく、その理由を述べさせたり、日常生活を振り返らせてゲームと通ずる点がないかなどを考えさせる。また、仲間作りや相互理解の場面を設定したロールプレイでのセリフの考案を通して、差別に関する自身の感情をより幅広く英語で表わせるように工夫したい。

3. 4. 5 一般的な開発教育の手法

以上のように私が実践した特定のアクティビティについておおまかに述べたが、開発教育には、トピックを選ばず、ブレインストーミングなどに適宜使える手法もあるので、以下に紹介する。(一部上記のアクティビティにて紹介済みのものも含む。)

- ・グルーピング：名簿順、名前のあいうえお順、ナンバリング、誕生日や出身地域別などランダムに分けるか、学習者の性格等を考慮して教師が任意に分ける。
- ・4つのコーナー：大賛成、大反対、どちらかといえば賛成、どちらかといえば反対と、4つの代表的な態度をあらかじめ提示して壁に貼り、移動場所を指示しておく。教師が問題提起する。学生は自分の意見に近いところに動く。その状態のままクラス全体で意見交換する。(教師がインタビューして、進行役をつとめる。)

- ・ラインアップ：線を用意して、横に数字の紙を張っておき、その数字の横に並ぶ。データ予想、特定の数字などを強調する（特別な日、月、年度など）。
- ・魔法のマイク：マイクを渡された人だけが話してもよい（マイクを鉛筆等で代用可）。
- ・ランキング：グループ内で意見を出し合い、優先順位をつける。
- ・フォトランゲージ：グループで同じ写真を見て、発見したことや感想を述べ合う。（TOEICのListening Part 1 対策や読み物教材の導入としても使用できる。）
- ・ロールプレイ：リーディングの内容やテーマに関して役割を決めて表現する。
- ・グローバルビンゴ：リーディングのテーマに関する質問を用意する。時間内にクラスメートに質問して答えをビンゴシートに書き込む。教師が質問を読み上げる。シートに答えがあるかどうかでビンゴゲームをする（テーマに関する予備知識のプレインストーミング）。

4. 授業全般に関する学生の感想より

セメスター全体を振りかえって最後の授業に日本語で記入させ、提出させた。大半が、英語の技術向上に肯定的なものであった。以下に感想の例を示す。

- ・楽しく学習できた。
- ・英語の授業といえば、ひたすら文法、単語を身につけることを要求されているように感じていたが、この授業を受けて、内容を理解し、自分の思いを伝えようと思えば自然にそれらが身につくのだなと思った。
- ・世界のいろいろな事柄にふれ、視野が広がった。この授業を通じて、英語力はもちろん、人とのコミュニケーション力、他の地域の現状の理解力などたくさんの能力を身につけることができたと思う。
- ・発表やレポートは大変だったけど、調べていると知らなかったことを知れてよかった。英語の授業なのに一石二鳥だと思った。
- ・文法に添って訳していくのではなく、トピックについて学んでいくというのが、様々なことに興味、興味が広がる機会となり、楽しかった。
- ・難しかった。興味がわかなかった。もっと語彙とか文法とかやって欲しかった。

5. 教育効果と課題そして今後の展望

以上のように、ここ5年間私が実践してきた授業について概ね紹介した。自分が実際に参加した開発教育の手法を授業に取り入れ、学生にも体験してもらおうと試みた。Global Issues を扱った教科書を使用している授業は、近年大学で増加傾向にある。しかしながら、単なる知識の注入に終わっているケースが多いのではないかと危惧される。冒頭にも述べたが、背景知識が豊富でない者に、その知識を補いながら、英語で活動を進めるというのは、決して容易ではない。インプットとして読み物教材を増やし、基礎知識を詰め込むと

いう方法もあろう。しかし、一般教養の段階では、そのような方法で興味を喚起することや、集中、継続して読ませるといふことには限界がある。また、背景の基礎知識がなく、書いてある内容を適確に理解することが困難な状況では、読めば読むほど、知識をうのみにする。その結果、自身の考えを構築する機会を失うであろう。開発教育の参加型の手法は、「気づき」を大切にする。方向付けはするが、最終的にこれだという唯一の回答はなく、むしろ open-end となっている。学習者は、理解をし、考えを深め、自分なりのアクションを取るよう促される。

さて、開発教育を英語の授業に取り入れたその効果について議論したい。科目はあくまで英語である。英語の技能を身につけさせたいということが第一目標としてあげられる。しかし、英語はあくまで、コミュニケーションのための道具であって、英語で何を扱うかが重要となってくる。とはいうものの、扱う内容を日本語でばかり講義していたのでは、何の授業かわからなくなってくる。そこで、背景でも述べたように、内容を軸にして英語技能の学習を指導する Content-Based Instruction に着目した。開発教育の手法は、あまり馴染みのない内容でも、シンプルにわかりやすく理解できるようにできている。もちろん、単純に英語に変えてすぐ実行できるものではないが、Content-Based Instruction に十分活用できるものとする。英語の習熟度があまり高くなくても英語をふだんに使った授業展開が可能である。学生の感想にも、「難しい内容でもわかりやすい」という意見が多かった。内容を英語で理解することが促進されていると考えられる。リーディングを基本とする授業だが、アクティビティの振り返りの作業で、英語で書いたり、グループや全体でのシェアリングをするので、ライティング、スピーキングそしてリスニングの力もつく。英語教育にとって重要なインターアクションも増加し、学習をより意義深くしている。そればかりか、活発なコミュニケーションにより、学習コミュニティも形成され、楽しく授業に参加できるので、学習者自身も活力をもらうことができる。学生自身が元気になり、積極的に学習に取り組むことができれば、その効果は十分であろう。開発教育を取り入れた英語の授業により、地球市民として必要なものと英語力を着実に身に着けている。

それでは問題点はないのだろうか。学生の感想の中には、「難しかった」「もっと基礎的な語彙や文法をやって欲しい」「アクティビティの意図がよくわからなかった」という意見もあった。やはり、各々の学生の英語力や背景知識を押し量り、よりきめ細かな対応が必要である。役に立つ語彙、表現、構文、文法等を系統立てて学習できるよう工夫したい。また、Content-Based Instruction は、内容を通して包括的に言語学習を進めるため、文法問題を正答してすぐに得られるような達成感を感じることは困難である。時間は少しかかるが、技能も身につくということに忍耐強く取り組ませるといふことは、今後の大きな課題である。これからの展望として、学生自身がアクティビティを作成し、進行役として実施するというを考えている。可能な限り授業を受動的ではなく、能動的にし、学生が活発に学べる教育環境を今後も模索していきたい。

引用参考文献

- Brinton, D. M., Snow, M. A., & Wesche, M. (2003). *Content-based second language instruction*. Michigan: The University of Michigan Press.
- Cates, K. A. (2002). Teaching for a better world: Global issues and language education. *Human Rights Education in Asian Schools*, 5, 41-52.
- Deen, J. Y. (1991). Comparing interaction in a cooperative learning and teacher-centered foreign language classroom. *I.T.L. Review of Applied Linguistics*, 93-94, 153-181.
- Haley, M. H., & T. Y. Austin (2004). *Content-based second language teaching and learning: An interactive approach*. Boston, MA: Pearson Education, Inc.
- 100人村教材編集委員会 (編) (2003) 『世界がもし100人の村だったら』 東京：開発教育協会
開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会 (編) (2006) 『教室から地球へー開発教育・国際理解教育 虎の巻～人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ～』 東京：東信堂
開発教育推進セミナー (編) (1995) 『新しい教育のすすめ方ー地球市民を育てる現場から』 東京：古今書院
- Krashen, S. & T. Terrell (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Alemany Press.
- 小貫 仁 (2004) 「何を学ぶの？」『開発教育ってなあに？』 東京：開発教育協会, 8-9.
田中治彦 (2004) 「何をめざしているの？」『開発教育ってなあに？』 東京：開発教育協会, 4-5.
Peirce, B.N. (1995). Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly*, 29(1), 9-31.

教科書

- Andrade, M. & H. Andrade (2010) *Life in Our Global Village*. 東京：三修社
- Asakawa, K., Uetsuki, C., Stronell, C, Lafaye, B. E. (2003) *Taking Action on Global Issues*. 東京：三修社
- Summerville, C. (2006) *Looking Back, Moving Forward*. 東京：マックミラン
- Peaty, D. (2005) *You, Me and the World*. 東京：金星堂
- Peaty, D. (2006) *Topics for Global Citizenship*. 東京：金星堂
- Peaty, D. (2007) *Good News*. 東京：桐原書店
- Peaty, D. (2010) *Confronting the Issues*. 東京：金星堂